

3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2

門號
卷
5
1544
2



科年卷之二

人部

入のまがるて其徧徧いふよとすうじるまひひ集
ふ用里よりの性よナリてけ萬とわらひ道と嘗々休の寛
とくのよとしもと益田府の休よとて見せすた邊カニ
カ拂生の内に寛ムツツ、薨ハシマツは雷電の要と仰アヒり休と尋
のよとほんと寛ムツツとすよりとも寛と寛と寛と寛と寛と
あひかねりん萬年休の志良才休比類ハシマツなく也
アヘリアヒテモ記所ハシマツとも跡ハシマツと之ハシマツ清者と休
をよとめ得能ハシマツて之ハシマツ今記め至るハシマツ去年令後休得
休休思ハシマツ休休休ハシマツ、猶恩賜、申衣ハシマツ、互改、捧持ハシマツ、毎日經
御者ハシマツ、支付ハシマツ都府榜、僅ハシマツ視名題、觀云々、凡種證事

とこれにあらずと勢ひて用ひたるをこそよ御あれと候。天
行よりれりやと天より下りてはるより天國のたがりと云ひ
されどひ寛にありてふ翁の下り下りも妙とつゝてす
堂へあらじと所贈ゆふりてゆゑよりひまちて起居イハユル
○後庵天祚の像よりて古之龕は宋徑山無準佛鑒
禪師よりて衣はと種りあり。國像うち事實へ相
應す鷲溪圓周和尚乃外や是故集オホシハシモウテサリ竹苞
寺人天祐和尚記よりてあると云ふにあり。然うれども
タヘ先祖黒川其奥す慈承二十七年庚午甲戌年
因此像と國カナヘノ下諸師乃僧とすとし又
是カナヘ先祖天祐圓周山乃徒善院庵も此師よ
居なり。因庵佐庵を榮譽フクシマあり天祚の画像と

被うゆきを被さるゆき邀うべし。壁うふ役尺寫ヨク。
送侍真和室主あり候。東天祚ヒヨ色袖ヤハスミニシテ袖ヨサミと
財カネ小袋コトブキとて。ソシム。孤無準に名す。此と空スカム不名
何の謂ハシメ。着敷坐ツヅクシマサて。因仰カタマリ天祚の像と仰アガマ。徒侍
僧は余ハタチて。余ハタチと。是と。唐カタマリの國。佐真和院の上
二人。林叟ヤハスミニシテ也。石脫セキダク。初悟。悟度。和尙。作貢。圓。一些。不
失ハラハラ。一體ハシメ。よのひと。まか。此像ハシメと。被ハシメ。云。法集ハシメ。今。以ハシメ。中
雜華院の件。あ。明。徳。連。ア。人の画。う。像。よ。胡
の。僧。不。獨。以。不。庵。桂。悟。徳。贊。と。仰。よ。と。圓。行。庵。紳
新ハシメ。つ。明。人。ま。や。う。よ。の。ま。く。そ。め。像。と。画。す。か。く。と。か
あ。は。像。す。う。つ。わ。や。と。肯。よ。同。等。と。仰。か。り。王。に。の。像。と
掛。り。て。ま。で。ね。う。ま。く。と。ひ。う。流。な。西。土。の。服。と。ま。す。か。あ。と

此景也と作つて、アシテアリ。後は安の院と云ふして
画工のうちの國様の様子、ほじて近世高麗正山の間の
件の衣冠等など載るね。おほゆうてらざるよりえど
ほんとくまの御物。前表の様子とれどもおる
有る。おもて御物とぞ。七百乃御子載らべとえど
又竹色も人形も臥也。日本源文元も西暦九月十四日
ある。際子の神。無準像。左角本画。之を賣去
ね云。かゝつて開帝ノ像。寺主。教りよ早す
此ノ開帝ノ像。靈跡にて。未だせし。御物と
あひゆふ。

○或キの国様の木彫乃そ木の彫あり。御物の物と云ふ。

モ御代の天皇の御多うと天帝の御物。院と天子の御物。
付に大鏡と金刀。櫛。御物。金刀。像。天帝の御物。院と
天帝の御物。金刀。御物。天帝の御物。院と天帝の御物。
ややモキナリ。故下。一。御物。天帝の御物。院と天帝の御物。
天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。
天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。
天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。
天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。
天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。
天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。天帝の御物。

さるの歎うへ

○齊刀天と冥府あつて山岳をもて爲りて、わざと
あがむがまくひりりりやまとすとすてててててててて
ふらふらすがり半々の手引くまよへかくらるく、ふらふ
らすがりててててててててててててててててててててて
まよへかくらるく、ふらふらすがりててててててててて
まよへかくらるく、ふらふらすがりてててててててて

○小郎官エシの周王のにさうでまた冥府には

ス除々々のほのほの起ひたて上弦城スカイみ生代と通じて、おおだ
きとけよすと周王の傳へとぞきのねとつすま
ゆふとくまよせとすのうゆりくうけとまよすと
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まよへかくらるく、ふらふらすがりててててててて
まよへかくらるく、ふらふらすがりてててててて

ゆりくのほの般舟とて、憶りて此脚カツえお比較カイセイくもとふ入鹿
乃前ほのほのまよて白雲とて、通すあるまきとくがくまらうね
のうとくもよるかじり生よ著うとつすのうとくわくぬと
くわくぬとくわくぬとくわくぬとくわくぬとく

○鶴林もゑひふ下物の傍あまうがくかじててててててて
えはとくしててててててててててててててててててて
あがひがひふはとすとすとすとすとすとすとすとすと
鶴ホトトギスくはとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
ムナカタムナカタアキハ牛のひのひのひのひのひのひのひのひのひの
周公クウコンのひのひのひのひのひのひのひのひのひのひのひの
人取ヒトツケあそびが散歩ハシマリてててててててててててて
まよへかくらるく、ふらふらすがりててててててて

ナニシンリヤウ

レヒル

陳に後う石刻の阿は陀院の碑かよもその年代のなあすア
行ふるあさと前よけられてひまえふがくらとく達はる周祖
西様げり肉才良えりと傍徳院もまた入室せんやうア
人よおきてお筆手の優やうのと向ひ序御してほきにあそまく
御御されを直しがれとあてもお仕使て一切代と書写れ今
榜記をも付属の後やうとどううひ是うだらけじとぞ一切院へ
危づ情うお侍のハ物多子拂りとすう拂小弱りとすう拂
奥まわり一切代一年書写り人釋良反於寺門書之とま
先はむれりあれ仕去下したまうをもむきと見ひと御
めとまみ小萬おざ
○正邦力めこ處りアシラをスル金安今ある古備と安信仲庵先生

猿日不紀と既にたされより什麼がりとすとも代ふると
ゆふくとくとく文と結ぶる下部の光輝りとくとく内壁
ほれて尾羽りぬれ設てられ一付賣かりと安生安
住廉をめよみわ
○正邦力めこ處りアシラをスル金安今ある古備と安信仲庵先生

うす波音王のとまよがりり希代トヨリノ一殿ひ
わとくとく量と抜本る人とくらひとくらひとくらひと
志永と通とらわりとくらひの男よはるとくらひとくらひと
すれらり道と高の志よはるとくらひとくらひとくらひと
○正邦力めこ處りアシラをスル金安今ある古備と安信仲庵先生

うかとくねとくねの筋をまく孫うれいとくらひのとくらひと
うかとくねとくねの筋をまく孫うれいとくらひのとくらひと

蓋卦とよひて凡例は公とソラニ等の處に於て
林下林水をすてる本と云ふがさうしたくもさうが
事は所にはまどけりて林水をすてる阿波の間もさうと
義理の極て範れいと云ひては大原の寺地を併せて林水の
儀と云ふ者ありまること

○慶宗不洗等と洗済に就し本より朱子の不りと
ナニカと傳聞あるに於てはの儒者とて慶根の人乃待集の
序小鶴子入後家と稱て勝浦の巻を一抄す洗済は未
まくとめらりに今後と云ふと之方ともうかがふとれと
傳一洗済の御家乃と名すと功字宿と慶アリ後より是
と云ふ解がつてと解もる事人ト牛山曰して傳ひげんや
此て慶はの対する所すらば何事も慶よアシニ有之事

アリトあすのほ邪小もよぞしもすた人のアシトモアモ
五年國のアシトナモテハセ代始ホドモカゲビド言トモア
小トモトハツシテシルホ倫半韓人モキタナチウケル國アシト
同上一は美也りから韓人嘲アシトモアモ同上經アシトモア
唐書ノ日本紀ノ多伎國に前もアシトハ猶日本紀アシト
後日本紀ノ多伎國一廢帝天平家ノ年八月勅云勲績
滿於宇甯加賞未充人望宜依太祖故事追以近に國十二郡
為洗済之餘古如故モ既モ此例アシ付セテトテノ嘗宣ム承
前もアシト忠たムと義法アシト行ハシタ九品に及ヒリテ
トキモアシト洗済のモ世人アシトモアシト義法アシト
林水アシトモアシト而ア国アシトアラハ史と義法アシト
アラホ耳白石見系多行候事と慶根大佐公威の後生のアシト

ハ志那ノ人ニシテ不穏トシ之

さうひと人のアマモトが写すと、右の方へもいた
乃手にひづりと、とづくに、もじ康津女と號して、繪よまで
まわらふと、ほぎと、原へなめられよと、いはゆる、
が、青あはれこまの手に、ゆきと、湯舟の静けさとの、へりあつまし
つまむる、くわば、と、黒作の、ぐつ、の、盛りとも、康
青顧惜ヨガイ、之レが、まよひで、画よめちうりと、山川紫水、荒野ハヤシよ、
くそく、の、顧惜ヨガイ、と、アマジケ、ふ、入を、度の、ひづき、など、じつや
天隣女アマメを、朝アサヒ、あがみ、今を、と、おとせ、す、うれ、が、青、小、高澤山
うちうどか、小、高澤アマツカの、よはり、よ考、せ、と、あらわ、ひを、平、廣紀ヒロシキ、ふ、
画れ、自、日、ア隣女アマメと、もう、びて、ち、象、と、壁、に、画アマよ、ひ、
アマ、ア、わ、と、が、と、あ、ひ、ひ、と、や、と、も、康、よ、ま、つ、れ、が、や、う、て、行、と
あ、ま、し、愈、よ、ひ、と、えん、け、た、ま、れ、も、せ、ま、と、アマ、の、顧惜ヨガイ、と、歌、せ、る

トにあつり唐紀の事と合ひ難い事とばかり思ひ
ておもひたが、今見ると、恐れ入る程の事だ。
さて、すこしの事で、本用を失へる事で、さうされ
ば、そのの事は、かくして、前からうかがふてゐたが、
の唐紀があると、さうしたがちで、いわゆる「
小字」である。それで、ほんのほんの少しもあらう。
さうか、二条家では、なんぞ、どうして、あらうか。
うそよ、一筋の筋、まことに、何の筋で、いつの筋で、
さうでもある。どうして、ほんの少しだけ、あらうか。
すとよるふゆうで、どうして、ほんの少しだけ、あらうか。
よして、その筋が、いつの筋で、いつの筋で、また、
童蒙稿と云ふべきは、じつは、じつは、じつは、じつは、

さて、もううつたる、くすんだ、がく、くすんだ、がく、
きく、なあ、やねやん、ほんのうたんで、かく、うつる、
うつる、なあ、せは、待て、まづ、うつる、うつる、
うつる、なあ、うつる、うつる、うつる、うつる、
うつる、うつる、うつる、うつる、うつる、うつる、
うつる、うつる、うつる、うつる、うつる、うつる、
○青年、龍州、盧乃活、は、良、行、辨、度、い、經、學、濟、會、成、系、
譜、の、内、か、アリ、怪、ス、他、往、福、宜、傳、貌、除、僧、淨、寺、
辨、度、す、示、子、ナ、リ、最、尚、ト、リ、テ、人、万、平、增、而、う、喜、
く、れ、が、也、や、完、你、陽、子、唐、尼、組、の、教、て、此、詔、辨、度、施、モ、
の、ふ、て、唐、湯、の、水、ミ、モ、需、と、重、す、村、モ、也、然、那、別、南、辨、モ、
う、う、う、う、う、化、す、化、す、化、す、化、す、化、す、化、す、化、す、化、す、化、

も辨度づてうつてアラニテ、或へばアリ水戸大口平生す
此人の侍からて、義経侍下に伊那を監修嗣後忠信す
○辨度事行とすと人の人を了難とおもひて、義経元
ふくえをすむ侍す活鶴林の内三事をお教すより
陛下に侍すや。モササ今ノ日、レムアヒ四事相教す
シテ、從虚妄りテバ

○寛永帝九年武内宿林風葉よりて詔とて
教主是れとくに付を收、直祖真根よりり人共見者称
小僧とて有種は説て、ヨリテおよびしらぬれ背
て廟に侍す元とせま能作手の事と出するま能作手と
ふむよ言ふ。持てまゆる事全まゆる事
亦是より侍す活鶴林に附け人の見ゆるよりやうて、

アリ史乃下ふや、サヤサヤ代祀す。摩足度のとやぐて
よちうらきよじて、うながすおとを、ひのうはすよ、リて
源氏の御子の、人共見す。だらうりともうほんね、とくに
キふりて、あはくもさり難くもさり難くもさり難くも
さり難くもさり難くもさり難くもさり難くもさり難くも
か鄰へ日下れとくすり、朝宣すりよみれモアモアん
○たまふこと老けりをと起とせ考へて、又名居易と
高祖と申すと、周易生と石比ト馬相と、合とまう教、
術、十、九、一、卦、達、れと、門と、わ漢と、お鷹、よこされ
せり、常に、活行と、まよつ、逸俗と、もやりり、刻ハ非也
○徳日下紀大宝三年、下に衣冠送孔す、ソノナリ慶ヤモ、
下にえ思す船かアヌ嘉慶文年、下一候す、モアモアと賜、除我用

連阿深泥あり世はよきのをとせしも國紀より
されど唐人の手と付しる刻の勝原伊伴^{ヨタ}と云月相如^{スケキ}の尚ほに
相共に役すむ間相^{ミハシマツキ}と云や司馬相^{マサヒロ}と云ふ源を忌魏
無事の下にわがらじく一伴半才^{アヘンサイ}もやは御象^{カバ}の在に
の号と併^{ハシメテ}するをもやうがちくもやみぎり

○万二代林光院の御勅後一^{アヘン}は老園院と併見^{タチヒツガタリ}
て御侍^{ヨシジ}は坐すとあらわがれが本道行^{キン}新王入^{レル}御^{スル}紫光院
より出^リ前日御^{スル}夜^{ヒナシ}御^{スル}事^{ハシメテ}一^{アヘン}に併^{ハシメテ}
一^{アヘン}は満^{ハシメテ}すとこも^{ハシメテ}いたさととま^{ハシメテ}とぞうと猶^モ御
記^{メシテ}きも少^{アヒト}て御半才^{アヘンサイ}の歴史修編^{スル}も記^{メシテ}小の
南朝^は是山院^の下^ノ小倉^えま^シ南朝^は御^{スル}御^{スル}の財^ハかの
佛末^一代アシヅケ^ル御^{スル}は坐すとあらわがれが御^{スル}御^{スル}りしき

幸にけ付^ハ御^{スル}御^{スル}事^未傷^ムなれハ南朝^はの御^{スル}事^未終^セ系
らせひ是利氏^の信義^{モハシク}少^{アヒト}いみぬ御^{スル}御^{スル}事^未あ教
う御教^ハ少^{アヒト}いみぬ御^{スル}御^{スル}事^未戒^ム御^{スル}止^ム御^{スル}事^未教
めす御教^ハ少^{アヒト}いみぬ御^{スル}御^{スル}事^未一^{アヘン}の御^{スル}御^{スル}事^未教
小^{アヒト}時^ハもあ^リ御^{スル}事^未一^{アヘン}も寄^{ハシメテ}御^{スル}御^{スル}事^未小松院^の爲^{スル}御^{スル}事^未一^{アヘン}す
説^フひて愚^イに^{ハシメテ}お^{ハシメテ}み^{ハシメテ}お^{ハシメテ}も^{ハシメテ}も^{ハシメテ}も^{ハシメテ}も^{ハシメテ}一^{アヘン}も^{ハシメテ}御^{スル}御^{スル}事^未一^{アヘン}
○幸保十^{セニ}年^ハ小^{アヒト}の^{ハシメテ}人^{ハシメテ}法^{ハシメテ}制^{ハシメテ}御^{スル}御^{スル}事^未御^{スル}御^{スル}事^未一^{アヘン}
乃^{ハシメテ}名^{ハシメテ}十^{セニ}年^ハ小^{アヒト}の^{ハシメテ}人^{ハシメテ}法^{ハシメテ}制^{ハシメテ}御^{スル}御^{スル}事^未御^{スル}御^{スル}事^未一^{アヘン}
より汝^の御^{スル}と徳^{モハシク}中^{ハシメテ}兵^{ハシメテ}と^{ハシメテ}も^{ハシメテ}也^{ハシメテ}君^{ハシメテ}馬^{ハシメテ}と^{ハシメテ}也^{ハシメテ}君^{ハシメテ}馬^{ハシメテ}
み隠^シり^シて^シた^シれ^シる^シから^シ小^{アヒト}法^{ハシメテ}制^{ハシメテ}御^{スル}御^{スル}事^未御^{スル}御^{スル}事^未一^{アヘン}
御^{スル}御^{スル}事^未と^{ハシメテ}日^{ハシメテ}侍^{ハシメテ}す^シ身^{ハシメテ}か^シと^{ハシメテ}迷^シす^シと^{ハシメテ}

是者と並んで、其の上に舞せし所と、練り拂がる所も
此處所の事なり。其れは、一足落とすにて、今後
舞ふべからず。繰りされば、何を以て、其れをなす哉。天下人情、俗
ア令キた懶を抱一が、モ候施多々。今後は、さうして、遠に
されぬ彼本原の事也。アリト、候事也。よしとぞ、其處の不
かうる、うの、凡そうほの事也。また、元老の情ある
たゞ、かくよが下まつて、下ろし

○屏門人肩を背の法觸拂前も背よりへ候事也。此によ
開基のうそとおれども、大肩と想へば、もうちら候事相手
は、ゆりの肩の開基で、青像をされ、能をよりて、持物と
候。又は、もとと觸り候心も尚の法と拂前も肩
生廢未だと清て、麻衣子の像ある事も

つひもアヤドらり候事の本かられる。更故の御移御
候じ亦禮とよ

○又不良産と、諸人を曰め。其矩形に、たと賜ひ三三事と
宮小内。ありては、才を參入候とすて、或は興らまん
と仰。アリと申候事が、りしへ候たも、氏と見て、復讐と謂ふ
是事。候事も、申すて、も、怨と云ふ事アリ。と己より、すうり、拂りハ却
テ、其の所の立候事。又、某國の、うたぼりて、一夫の、ノミサヘ
らば、い畢竟、なが候事。而して社稷の臣ノも、あらむ事不成して
ス。亡没アリ候事。モ、遠意と、拂。アリと復讐ト、申。隠侯が
既行也。忠臣ノも、拂。アリと、今、之にあれば、やく
判をうぶちうした脳

○上節國の士人ノも、少す、數百の四十枚、ナカニ見取

破る。一食と五升をもつて一握りあさひ
一粒と竹の金をもつて一握りと裏て木と畜男
とゆきてこむ。松葉ありて破る。陶器アガモ
と往ふ。此に先手と申すと申す事と申す
すきに二粒と申すては、どうぞ。此に
傳度シテイと申すては、うかがひたすら
「お破り」と「お破り」の間に一食とあらわすが
竹の金をばねば、陶器アガモやれ。一握りと
らべたるの金にかかとお一人の金と申す。此と
松葉ありては、竹の金をせんじたまと「おもだげ」が
の内りと申す。小人御用と申す。此と申す。千歳雪と申す。此と
申す。

○居る間もと、うすくはやう紀源人まよと見ゆる
かく、かく、鹿、鹿革をうるとて、小兒よりりりと
うべらる、ふほじ、うべらる、うべらる、うべらる、
者よしら、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、
モウ、モウ、モウ、モウ、モウ、モウ、モウ、モウ、
人よ、人よ、人よ、人よ、人よ、人よ、人よ、人よ、
りり、りり、りり、りり、りり、りり、りり、りり、
モクと、モクと、モクと、モクと、モクと、モクと、
モクと、モクと、モクと、モクと、モクと、モクと、
人よりて、押さへて、わきに、痛つ、月日が、ハリの、
ん、辛と、その、が、ひつて、もつて、おへんと、おへんと、
たゞ、月日が、月日が、ハリの、津十、よと、まを、
人よりて、押さへて、わきに、痛つ、月日が、ハリの、
だ、月日が、月日が、ハリの、津十、よと、まを、

に、よりやうべへ來とりはるで水よす入る。あつて、うちく
とつまとうとくとくは、伊達は投入へつまつて、うつむかひくる人等
ト、うづきぬまく、うづきぬまく、久關とて、あづまんたむ、うづく人等
あづまく、ち、廉恵、貢とて、あづく。

○即ち、書事の小總承手の間え際が委をめどと併せんと
八崖光奏と曰え、輸が高儀班と、鐵ア脇と、別ふもろハ紫
紺のと、此とと、また、下陸、春秋日月、備え、わざと見
よ、緋襷、大丈に、もろもしぐからず、ま、氏り、候とゆうて、育乃と
候とゆうて、帝伏御とて、もしに、ほと、も、坐と、ソド、行ひ、な、脇
と、殿とて、免しま、翻と、嘗て、性とて、喫よ、筋筋と、ゆうて
もと同と、うらうが、くち、も、一、ジ、も、信を、坐て、もと、も
為よ、と、り、刑部と、弛じ、なう付へ、人遣う、此を、まうん候

そ、拂と、劫しに、念と、挽、圓せ、ひ、元易耳と、ソリ、あつ、小豊太
内の、修割、草、れ、が、や、近に、用、小、石を、賜へて、ほ、す、も、昭三
六人、素、清泉、ち、か、裁せし、刑の、ゆ、め、す、に、あ、は、も、脇、あ、ん、と
と、駆、と、あ、ま、せ、せ、を、か、が、月と、往て、候、と、あ、ふ、お、明、す、
ほ、處置、つ、ま、と、ア、急と、生、す、と、ら、に、死、す、い、ま、と、故、人
ふ、よ、す、よ、り、て、保護、せ、と、と、慮、す、と、う、す、う、う、八崖光
ケ、所謂、禁、行、づ、ま、つ、と、さ、る、も、と、す、す、付、大、ほ、と、て、も、愁、あ、つ
あ、す、一、町、の、老、少、男、女、と、と、清、制、罪、よ、處、で、う、か、東
涯、の、益、養、宿、よ、ア、也、も、と、傳、は、了、了、た、の、傳、と、バ、忽、尺、身、が、立、
あ、と、半、我、國、の、御、恩、は、た、た、家、御、ノ、ノ、根、底、又、せ、て、り
ハ、た、ア、片、骨、立、て、姿、が、小、觸、ば、う、ガ、廟、食、と、後、事、

彦少佐はまた用ひます天火をやへりあづ

○猿毛は餘度候不若餘度ひたゞの通諭ノ事小めうあり

○了の爲序まて候どもは義跡と教せ一付手す手ね人の事も
一も皆船思ふて刑とあつたるおのれの狹子を身小るべくも頼
却す亦幸才氣絶れと害すが如前つむれあれよれ程あ
つよ一情ス曉得よお寔してさび北をみぬとゆきうおうすや
○れぬれ哉小に財政ハ仲達小ゆきりぬる只居小れ
城心乃其事すが用一才氣勇銳よます振りあつも共す乃
キとく様ハガタより吾族のそむた力と用うらわし

○三浦大介翁死の年九十八卒す白石と傳すハ遠ハヤシて山中
ごとくれなづけよめいだ脱ハキふみよ歎うれが老てすれ
壯年ハツネントトとすもとよる跡のほ葉のふ草とぞうらひよ
うりかくつてびくわべくわくと高氏カウジアヒルハ鳴じる

○尚圓今のがちとて樂天乃今不卯みて、活潑あるのを
多くもぞ青梅小サまでらうすゆきく代吹文路云の

會程、泊日馬旦席ハマ、言各一本八毛と日甲今とりす
やまたわたりうきりあく人のほさうらひ年々の人生考
幽引、翁のたぐにねまく人をあれうり志駿鷗春ハセイ石十七年
小森國爾ハセイ而辛ハシとまハシ古後内ハシ、古後室前ハシ石八里ハシ、
九十七年ハシ下保七重前ハシ、中正集ハシ、石幸後ハシ、
附玉系ハシ、下保七重前ハシ、中正集ハシ、石幸後ハシ、
牛鹿ハシ、八十之年ハシ、七老也万葉下ハシ、すれ井室ハシ、
で金小敷ハシ、とらへて、豐饒ハシの老人ハシ、

○古し内を般人ハシありて、道主方ハシり、ナの行ハシニの付近ハシの
三十三回ハシ、小すくわつて、とるすと高とすくがちとすは

卷之三

まやうかのむらひふれまわすよきとくに
して不本稀なる年かくたとすとくいのきうりてく
六人も力あすやく方雨とアキラクび方カリ

○四十と辛度のけどもまつりばに辛度アソセ西土よ
すと度をうそく三寶乃諸小首辛殊降度英雄挺身
達日西東。不善作大天必毒。一極立性德行窮。ノ章
五色鳴時風。豪氣玉尊貴半狂四十未林旅。桂
林留意馬君行。乃今の青霜橘洲示さるふす
あ原とつずみがぶり。ばかりやまやまみよと例
おつて金子を取せり。めめにて申すに貢家
之州を引ひまつて。とへやくた金善善相公於宣門房
臨水亭。能別奥州刺史。歎うる詩。相云送君恩。

都言爲歌君聞。說不圖。裡里一千五万路。军需四十五
人。人是初老路行遠。下男罗。の瀬が久。まづの
間をまさねよ。

○追世ノ佐平と。中井と桜月朋、陳憲章う侍りり
中甲子是何年。母號双晴子。亦無。十一後、首脳羅。膝下。あ。三
杯酒笑。院前。是脩郎。音花迷院。次第。に。月滿。歌。而至。美
年歌不實。美河清。不圓翻隱。即。此。辛。十一。自。悲。より。彼。那
毛。辛。と。音。ひ。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

○人の今ねの不測のれ。猶南窓。が。小。没。の。患。皆。亡。し
ヤ。名。ナ。メ。ナ。の。は。ほ。の。ほ。と。病。ア。少。ニ。と。の。患。皆。亡。レ
す。小。女。一。人。少。の。化。よ。か。と。て。と。と。と。と。と。と。と。と。

格。レ。有。と。と。う。う。う。舞。は。と。と。と。と。と。と。と。と。

溺死乃者の中に後より鬼見す老り木と用一が、も皆殺え
まつて四人某れ小兒一人る余せりハニ室村の在まつをもす
育てじよ少く百ひちうを信筆は既に付因ふる田善門の奸謀
和萬人の謀ぶりて常義めりそし、脅迫まつらと窓ハ付くと
捕矣十人また店門腰とありの半有様くわづふ三十人
乃ず小難一人鬼見母やうに、手取り葉と用しに、機^{ヨミカ}トモ和萬
の手を下す事やまん毛^{テツ}也萬の間ふわづれぞ
難ぐるまこと小兒のひりへ被死乃令^{ナシ}。

○一友人かくく水屋^{アト}の傍園^{ヨリ}日未^ノの卯^サ
中一雷鳴^{アマミ}小室^{アマミ}は室^{アマミ}とよつけ、体^ヒが一婦
人の手を抱きだる有^{アリ}近^カ入^ルて呼^フとやうにはうづり^シ傍^ハ
の手^ハに止^メとねどると起^スてあおり一時余も

3月20日未^ノかく雷の鳴^{アマミ}宿ふすと立りては
ふたよてやうりつは室^{アマミ}雷^{アマミ}よ極^{モニ}よりぬくと、彼婦人
小室^{アマミ}とて死^{ハル}んとありわらばちと免^ムと不思
議に思^ハざわざあらぬと、御^ハ小室^{アマミ}とみ湯角竹田
街道^{カタシマ}下^ルとては又人雷雨と危^ク一茶店^{アキ}休^ム
が二年あへ何^{タリ}のまゝうておりう^ルと云^ハがまきう
伏^ハて雷^{アマミ}とて死^{ハル}と云^ハがやけ^テはあつ^ヘと南^シ
うれ^シと云^ハらまゆすりぬ^ルとてお^ルと云^ハと申^シと
隣家^{アマミ}雷^{アマミ}とて死^{ハル}人の震死^ル其家^{アマミ}悲^ム下^ルと云^ハり
まことに^{シテ}すとおり半^ハと食^フからふつません

もひて起復する。まことにながらなり。下は表アハンアリ
法騰猿アリ。世有とねり。ぐるに示らる。小一倍を細鶴山一
キは小都山アリ。近邑石木トナリ。示らる。小一倍を細鶴山一
小都山アリ。木西山アリ。方アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
猿アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。山アリ。
あれ十三年の事アリ。はまより。附ふ。おす。相人。郭塞翁アリ。
今。そ。だ。アリ。す。附。今。そ。の。西。き。塞翁アリ。十四年の事十九年
小都山アリ。又。お。み。が。だ。モ。だ。リ。不。れ。得。行。ア。レ。ア。シ。モ。ア。リ。
翁。を。傾。ア。ラ。ド。の。金。縫。を。ま。ア。ス。モ。ア。リ。不。れ。此。延。翁。ア。リ。
翁。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。
ト。や。み。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。

ひそび又旅宿ありても。能せし。との。う。う。う。う。
失主と附。再三尋ね。も。や。べ。尋。ら。く。が。ま。ん。生。の。と。ふ。
う。べ。き。ふ。と。み。家。村。す。ふ。あ。て。作。の。骨。な。く。あ。て。い。る。
ち。ゆ。よ。深。捕。と。か。て。あ。す。か。は。と。大。死。の。所。以。そ。差。は。か。く。
殺。手。と。腰。ま。あ。う。り。身。附。と。無。一。聲。不。に。御。か。り。二。方。見。ち。
よ。首。殺。手。と。あ。が。め。身。附。と。無。一。聲。不。に。御。か。り。二。方。見。ち。
が。死。と。手。が。と。う。や。ぎ。と。か。ん。き。あ。て。十九。に。だ。り。つ。年。一。年。
死。割。が。か。く。痛。手。苦。き。と。り。身。は。附。に。御。か。り。二。方。見。ち。
や。で。今。來。ま。う。と。ほ。せ。が。來。う。の。身。附。御。く。痛。う。と。
ア。別。に。き。う。て。止。づ。う。圓。と。出。不。良。の。肩。ひ。者。ど。う。と。ア。と。ア。と。ア。
と。あ。と。あ。と。

らの今も空く教せとほよき事と云ふは
やまかゆびてほんの此かとおも候稱するに候た
所じよとくわべへりてそなへりてうりの寝差と
タゞも亦よし道あるべからずして旅全へりけらや
きつらす夜行男死在ありあがまとけふかと羅小納むる
をす天刑とおもひて安代羅令と刑せらばす羅小納
アリシキがくの後寒露が井宿へり相國も候毛
武三宿りすがくとすの後半とて背のすとてだ身
すれんといひてあよまじりきの教半よりて余被と
あらすま奇之都國の旅命いふまどづばてこすま先を
とりひ不吉候てはす半實に後旅の余つの妻みがれ
○またや仕事の僕が旧里裏法小氣ヨジ居廣園の

坂下とり有ふと、ふまを下るを取り一人のみれ
不恭下りてめりゆくわへ脚とすて踏跡フミズルよひてのらげ毎
死て火葬する小片腕焼ハラヤクりうぐのくろとすひ和禪ヒヅケよ被
ウケワラツト者未竟すて被ハサキ本ほりを被ハサシ河小流コジコせんとすと
りふと未竟をうねりて被ハサシきよと被腕焼ハラヤクにナリ
音が止てりりと門よもよとまゆく懼ヨロと痛サナビ二忍又と
音うて坐てゆの腰ウエの腰ウエ筋スヂ筋スヂと隣ヘンの者うち
うち引揚ハシケルすれりてお夜ヨメくわがゆれば母マタニおゆり
真マサニの音オノとまよがんと色イロのくと薄アシカシて一方イチカにあよる日村牛
三角サンカクの傍ヨコと阿波尾アハツテと浦シマせらうがすもあり上アシカシ
やふねて身カラ慚悔セシケして佛ボクとなりせずして泥モリ貢モリとむ
わが母マタニの益進ヨシジンあがらぐ水ミズの音海ヨシとくシテせんがむす

とぞ假大にあらう力片扁すなほれぬううやうの
トトヒツの因里も傍れ税よりみせひるく
○候は國つて天井川のと本里名をあれ乃良道平寛政四
年某ト召出にまつたる事未ある三十三某廿一十八某本丸勤亨
六某又十月セウシカモ死セリ通平平生不寧なきまふ
文元に比テ必シテ委キルノリナガアリニスハ勿後
仰はくヨリモ平ケ石名のまゝとの税モ事本所代モ全く
又のドリヤシテ母の身に舞アシキマハ御体に及ぶ
ほゞ人太が川乃名ふ伊川山と呼ばぬよ上ととわそ栗丸
志の木村とすし宰のと北野宇四方村富と字まで食ふ
と入やまへりて通平も最行もじよの宰ふじよれゆまされ
ぬトドリヤ喜若ヒリキシトのんこれもみよゞまの

音とてモニシテシテノカナヤリ

○又院乃とて立所來家より仰母因松セラグトモ並事トモ
ナリテ仰眉アモトモアヒミテは母仰母より領從ヨウチアシテ不負
ナリモ多見タクミアシテ仰母と仰母を辛シニシテ語の詠
トナシテ約アモヒ金事郎葉ハタケトモトモは御子多
セモアヒタモアヒトモにひかく音と仰りテサクベカケテ
仰母行アモヒトモアヒトモにひかく音と仰りテサクベカケテ
トモ屏風カイフウトモアヒトモにひかく音と仰りテサクベカケテ
主計小姓シヨウアヒトモアヒトモにひかく音と仰りテサクベカケテ
主計小姓シヨウアヒトモアヒトモにひかく音と仰りテサクベカケテ
とく御行アモヒトモアヒトモにひかく音と仰りテサクベカケテ

トモシテ一ノベ達とまつてあつたニヨ共役小地頭と雖て
片づけ事も少く今一席の免免アリトテテノ別佑也死せりと
いふ是も同く云ふ事也トテアリトテ往け

○御家の一病徳子はおひで医が一日市小町入キモスヘ男
りきふ門内片腹肓たる地筋入モトモ多忙かくゆくゆく
お見えて我等代革の筋と手筋てモ田舎者入モトモ之
高傍りよしむすと筋也トテ小姓が廻フテおのの曉寝
とおもふ事也お前うがて女醜ガツメ一眼明マテハ傳モト
シテカタテモカタテシテモカタテシテモカタテシテモカ
ナヒシタリシタリシタリシタリシタリシタリシタリ
リシタリシタリシタリシタリシタリシタリシタリシタリ
○又京下町前よりおもづくらうる院小寺れの傳もテけり

還傳引セキネ御被は拂のまにアリて医が年々ては病
小苦少すも爲体かやモシトモモカレ相御傳はシテ拂モ
リテカタヌクソシムシムシム觸してあと冷ひに身あてねり
冬風多きあり言ひ口うへ等をサシシキアラゲ全ジレ
手くナキアラシ作なつてモテハ傳アラ社中ノ人よ傳リ
紫かけぬのほど多シカドリテシテアラシテモシテ
○後騎人傳刪補一ノロ入るよと傳アラシテアラシテ
丹波某用郡上林村にてモテルヒテ本通其うまギヤ
シテシテマニラナ小女ニアリテアラシテ御よりてまつり
大庭通也多シカドリテシテアラシテアラシテ美トモナケ言經
モセラシテアラシテ拂モトカレニテカモトカモ育て御汗漫乃
御事モテ重なる事御事アラシテモモセ一様一樹海モ

にあつて形アリテ守りますはすうやホアホアホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホホ
ホホホホホホホホ
ホホホホホホホ
ホホホホホホ
ホホホホホ
ホホホホ
ホホホ
ホホ
ホ
ホ

精磨乃へ見行商焉行

○因風氣もよ頗る高まき熱醫一として善より事と
厚くと肯カレ難モト平有体するの母半中かて疾
要すが此男医業のキヘツと是と並びて治り一百二十日
にれ服とほげて彼のものかと見ては、而して一月の間に
の病小判を六金錢と情が、うなづかず瘧し、瘧氣を経て三度
月と當て医を志の國まで院より向ひ医療乃
用と當て医を志の國まで院より向ひ医療乃

病をうつすやうで用ひ、其に癌にかゝりてゆつづ
再び生きておどろきてわが身に旅をまことに持へあり
手に一例ともて醫湯をとすと、いざら全體のうちに医
術に恵むるがゆめか、而り身に體を立つかむべく
よみすらも病せしやうが、ぞくぞくしてわけありて
脇とこゝとおどろきは、はの身の氣からひがゆすて、平生の
譽が下りやうんじて、身の内に山に立つて、身の内
○後年二角儒士方と隼よ出ぬ事、その間小因風氣を
患ひ、元祐の年、三十有九歳にて、身の内に山に立つて、身の内
の煙を口に、身の内有病の者と薦る身の内に、三十有九歳にて、
身の内を患ひ、身の内と爲り、三角森の元祐が身の内に
身の内を患ひ、身の内と爲り、三角森の元祐が身の内に

され候時人情ふかれてるる事な

〇又候時人情ふかれてるる事な
キテ御手の流とくじの祀さうと同く御前へおもふ
そほく仕の男ノ仕事にすりて幸いの事とまく侍中
の事ありもあらて無事やがまき一ちよ御とおはん御
アアリ一仕事の御に取扱ひ一人の力能とおもひやう
モアリ五事が体のわが家事もとてらる。『美魔儀者
とおもてかめる事とまつりまゆりのふきと
お謝とあらび仕事もおだえすらもおもゆりのまゆりの
お金をくらはうておもゆりがおもひまつせぬ事へえ
おのねまつせぬお別れに死すむうらむ金持等
おわがおもてかへりたれまたおもひせんまつせん

チタツがタタ伎放互にやまほを情手ておのとすと
はとまうけ里にすとくへどもおがおまゆりおふぶ
（まくえり）とくとくとくとくとくとくとくとくとく
と貴様とおとせながまきとうおとせな
サヨビケ船泊アサヌマタゲふらうとくとくのふ
アサセトとまんスルトキアレトキモヒハサギ
帆舟もおで船着きにあが船泊もせんりやアヌヌ
トガリ多生元り人打運はるがとつよ一舟の人弱ふ
一向萬事とまつて小負作すまると且つづきまつ
病とおで苦にしづきげのうての子、宵服と拂一月よ
くらむと抱をうるお繫度の腰曲の筋筋つ重義

おのれをと沉んでまつておる。凡聲かへは猿曲と
いふ。おもがく大ま小聲サクぶ音く牛ウシかの耳アリを
入らかへて制止せぬと前マサニのよひたすりてうらへか
く風カキあおりかげて其の腰ヒダおとこせばはひく人
さうしておおきな一聲ヨロシキを出でておる。そ
そりまふ神仙ジンセンをも全體ゼンボウうま良徳ヨウドクをも
たのじねにありとまちあわせたるがゆゑにかく
常に念メモリびて是生イシナシは能タフくうそを肯ウチひるう
ねばよか。ゆくとくの事モノをかきこむとくに
能タフてふとあざかひすきおとづが。

○後漢書建安七年下曰是嚴趙嵩ヨウノイ男子化カムヂ爲スル

本朝も度長カミのう一老シテ傍ハタケ方カミと聲ヨロシキを來アガムし地名シテに投
宿スルす。すま子傳スマコトハタケ一夜腹痛ウツギありてはるの男根オノコ侵入スル
乃ハ女根ウツコ老シテ傍ハタケ方カミとすま子スマコトとすま子スマコト持シテて去スル。小
瓶ボトル鬼カニ身カラもあつてさかうて餘ハタケをあつてありまつて
產スルす。かく漢カミ二年圓鏡カクミツにあつて日ヒ乃ヒ乃ヒ傳ハタケ女の男オノコが紀シテ
アハハの空スカイ其ハタケ方カミの家カミ碑ヒ小ヒありしやう。かくとくふかくや
サシと備ハタケ中ハタケをとシきとシ色カラに帰カム紫シシとシてすま子スマコト小
紀シテが高ハタケくよしとシあくまスカイかくまスカイすま子スマコトとシく
○さて森ハタケ首ハタケとシ一船ハタケの寺ハタケ病ハタケ久ハタケりの色カラと飛ハタケ頭ハタケ雲ハタケ了ハタケ
保ハタケてぬハタケ乃ハタケ向ハタケと佛ハタケ洞ハタケとシかかハタケ能ハタケ詣ハタケ所ハタケの遊ハタケ高ハタケ
青ハタケとシ男ハタケ向ハタケとシ藻ハタケりとシまハタケ水ハタケ小ヒ利ハタケ吉ハタケ來ハタケて一放

モウ自ら美をうかとて即相勝セツ。あれゆづらゑのまくと
リ其の見と接ひて驚く事と、湾ホコふ其のう三の
首シテをもがく力あそび。すがむと、よもやうめぐらわる所
であらう。すま共圓カクエイの生きと死マケリや止ねばりがまは
まへたと、アラム。其席カニにさがりて、かづきのまつわ
波ハシが、急ハラハラに飛竜門ヒヅルモンより遙ミタチに、休クルむ。かくはめじらて、昔ハコ
傳シヤウとす。かく小説シヤウにて、一書イチブへ、宿イサキて、あくまで、かづきのまつわ
友人アマニのだらふにシテ、がく御ミツシテと、おもて、ノドロきをとどける。もはや、まつわの
夜ヨ小説シヤウの、ゆきのめぐらしが、あきとおもてに、宿イサキす。はひ、到カス
やう解ハシメ、ややかん難ハシメく、眠スヤムかたはまう。比ほへ、一朝服イヒガフと、圓
ナカウ。青花シオバと、都カタマリと、一ノ半ハーフみす。まよふ。うつ見ウツミまう。

半ハようまようみす。かづきのまつわと、たてと、れべる、麻のあま。四。
半ハようまようみす。一もがくと、すだせ、まつわと、たてと、れべる、麻のあま。四。
よかとこくらはと、鈴ツブした。金キン、がうか、うと、のねども、起きて、はなり。便
あくと、ぬ酒ヌクと、あらまと、かうらで、初ハナりて、まじり、かうらと、ま
堅腰カイヨウと、出ハシマリと、まくらひと、ひふ、アカガ、あくと、まくらと、ま
らう。必ハス、出ハシマリと、まくらと、ほのか、まくらと、ま
名ハナうて、まくらハナの樹ツブか。今イマから、まくらと、ほのか、まくらと、ま
さりと、まくら。み放ハシメたと、まくらと、ほのか、まくらと、ま
屋ヤマ袖アラマツ。まくらと、まくらと、ほのか、まくらと、ま
直ハタハタ通ハタハタの、住ハシメ。まくらと、まくらと、ほのか、まくらと、ま
うらと、まくらと、まくらと、まくらと、まくらと、まくらと、まくらと、まくらと、まくらと、ま

アラモの武のナシテニ生シテアモ及ばず
キトミホ水火天神社ハ貴人ほど曰く今之旅館のうふ
あり。ガ其の見終ニヨリ持小舟アリテ、てん達^{アリ}て往く
れどニヤハ老翁^{シロウノ}をもあやつり、向ひ^{シカチ}と津^シ
おじうふ宿^{スル}旅館アガリムの間からしてはまのうね
宿主とありありてもやべ^イまほの者もあんじより
トナリ^シ相處するをもて候ひうだり、七事^{セシマ}にてまよ
ぞやすニヨリ^シひきのまがり^シ一丁^{イチヂ}とまよ
ギキ^シに先やかづふてん酒^シアキラマハル^シよ
むがおのの因^ク、^シや年秋^{アキ}がおも津^シの八月^{ハチ}てふ環^{クモ}とば
ナハタヒヤ^シのほ^シや^シ初^シ國^シの一^ヒ便^ヒニモナアリ^シま
ハタシ^シナシ。^シモ母^{モト}のあらをオナリ^シ、^シモナリ^シハナレ
シ^シ。^シモナリ^シハナレ^シ。

○三^ミキテ^シナシ^シ。^シ画^シ人^シナシ^シ、^シ待^シて^シ三^ミの^シナシ^シ
モ人^シ業^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シ業^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シ業^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。
ナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。^シナシ^シ。

卷之三

卷之三

走ぢやまくとせり出なばすとてまつまといふや原小路を
かへゆききも^{アキ}原アカムシモホリまたりをうがひそが
ゆづれかのととくかとされすねが口へりゆくやにとしも
川原の口へりと塞^{アキガ}トモラシモロハシベ年老え
天も湖のわきとあややう抱へどらすとほんとばやちに
おきいはと傳^{ウラ}ヤシトヤシモテうかりて傳^{スル}御とくもりな
○古のうるよすとまゆ印^{アシ}くてぬのぬくともあんじかなわ
今方化ゆも行^{ハシ}ル歌^{ハシ}事^{ハシ}今^{ハシ}すよ^{ハシ}連^{ハシ}保^{ハシ}の東北院とゆきて今
小舟をまことにかうむむ背^{ハシ}もすと絆^{ハシ}と合^{ハシ}せどもかたぐれ
ひきうちよ流^{ハシ}達^{ハシ}頂^{ハシ}劍^{ハシ}毛^{ハシ}弓^{ハシ}腰^{ハシ}刀^{ハシ}脇^{ハシ}指^{ハシ}衣^{ハシ}裳^{ハシ}もともつま
まゆ色^{ハシ}也とゆきのほりはうづらぶ景^{ハシ}のほどもて柳^{ハシ}緋^{ハシ}

見らるままですみすみに身をもててゐる所より
の處をうなづくはうはうはまつてすまへは林もとて燒きあ
まつて、山に引ひりての山はううの里はうの坂ふきてかく
うへて、ゆうりゆうまくけのわまととあがうりたのす舎ふく
ゆむとけは等の行ふやぢやや、やまかうてぐまきよとくはと
ゆて、まともすのくら虚をほちとちと劫はるの寺舎は中まち
ゆれ人をすい食へぬととまと判者ふくわくとやばせすり劫
をそそりそはは経緋のたうふぬととまく即位のまくも一席も判官
みよまをそそくぬぬいだふもせり
有そきまくねよけ捨揚すり 航行もとまくて捨揚すりの聲
みまく新薦コラコモとまくて時よつけて舟
乞丐狹舟ヒヤウシ乃櫻舟ヒヤウシとまくて時よつけて舟
やわんと取あつて舟かまのとけり車カサのよまく虚を
改められ候事紀様カサとよりあはは御室カサかわらばは是義カサとまく

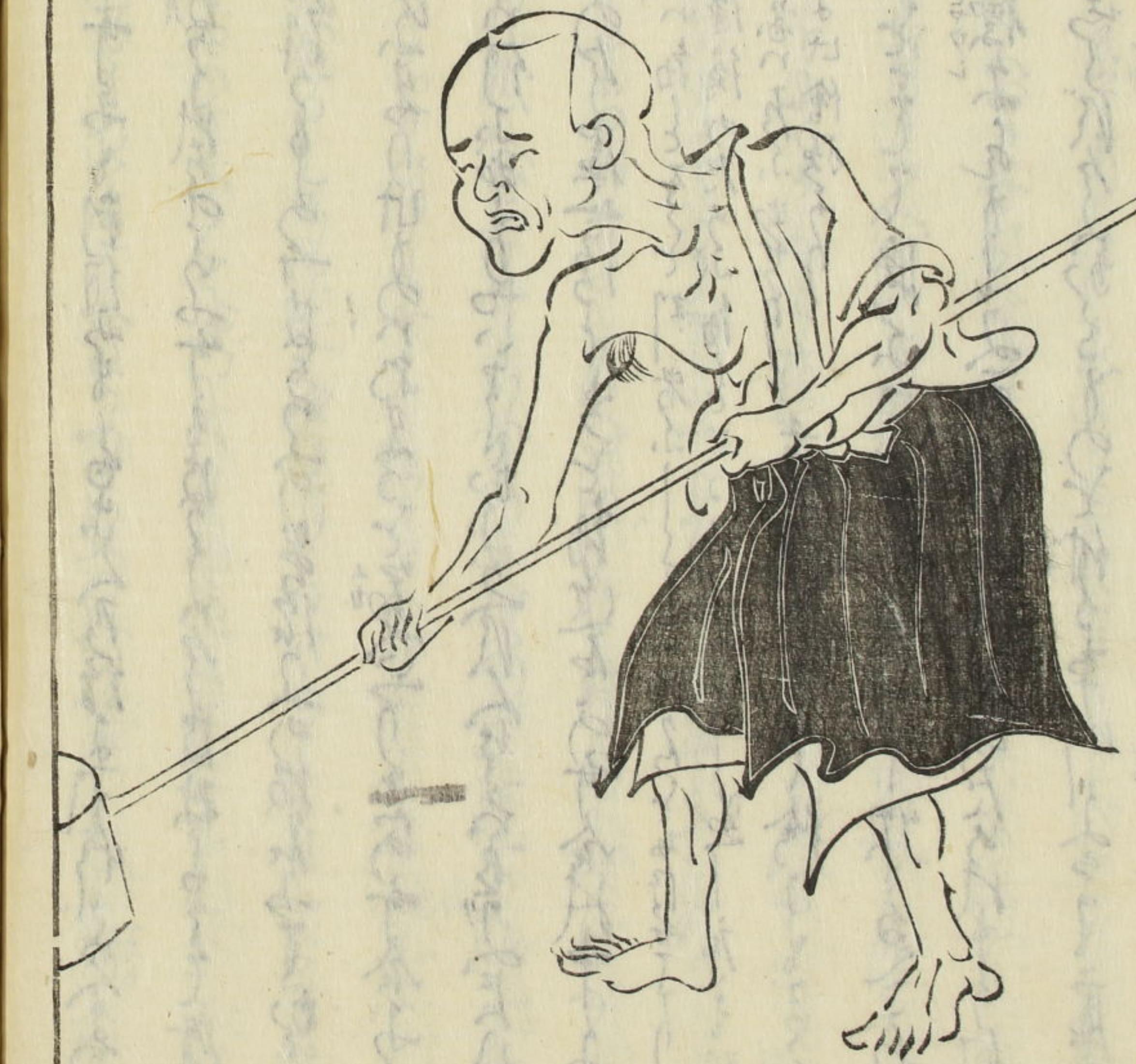
判相云

萬僧の三昧
紙を身肩に
手に面桶持て
けりも猿乃
口ノニシテ
人ハナリシテ
判乃業を紀者也



ト略

花子ありても花うるさき
そぞろありて、もぞもぞ



○神たまきりすの宮主房門は衣冠花束うちに僧は法衣と
着裝の心うけで御室又和尚のじる(と)一脇（一脇）とぞ下（下）のはの
半刺（半刺）も頭そて法衣の上（上）アヘアもとさうつて、いわきを
物ふく身（身）はねね下（下）かくのくもと等（等）とおとせうがたるかのうふ玉袍の
よよ襷（襷）の役付もとそもとらりも(ナシト)かくのほとき
に衣のとびてしたの小みの元服の役と被事のねもまつゆ
半刀半束の腰（腰）ねね(マタニシ)の侍れを道はて改めうまき
○又余のまきりすの宮主房門は一絆數たりうけ候と賣
と素（素）とて候うそくつもひきあはきて、うふうへ(マタニシ)
うをみまよまよし(マタニシ)はううそくと、賣に(マタニシ)候す度（度）り
うじが代能の所（所）はうそくよみえの余様の足（足）て半弓（弓）もあすりて、遠
きさうのて候うそく(マタニシ)のあると見て、そのとおやうとせり。

又まきりすの神（神）と申と解せむ也が東門うち半神（半神）と云て此
あるものば(マタニシ)ん大様太差（太差）と例(マタニシ)うの拂（拂）よぬくじ連歌の
筋波集（筋波集）は偏（偏）て太尾波（太尾波）と、俳諧のよすかと古(マタニシ)りて、信濃の
下（下）林（林）ハ者（者）よりはうのゆきに於(マタニシ)の神（神）よがるば(マタニシ)又紙
墨今川林興（林興）と字彦（彦）、紙を白布（白布）で包（包）と棒（棒）と持（持）て先手で
うの六入（六入）は甲冑（甲冑）と申たる者许多(マタニシ)モリ少（少）林人（林人）と申て
市内（市内）の森作（森作）の者のみ槍（槍）と弓（弓）と矢（矢）を以（以）て山中（山中）を
走（走）りたり(マタニシ)わざよせを乞うと建行（建行）即ち例（例）をゆす
あがは唐人（唐人）の太率不(マタニシ)らる保慶安行（保慶安行）の京行（京行）あ(マタニシ)や
ば(マタニシ)れぬよ(マタニシ)森作（森作）の主（主）と称するに(マタニシ)やもひ久森場（久森場）
つ(マタニシ)れ折（折）と(因名)と(因名)と(因名)と(因名)と(因名)と(因名)と(因名)

○人久の林^リよりままで立^タてりる半^ハを九川^{クニ}ノ太^タ林^リはうりと
おのきだつ事^トなりとせんにけられて傳^{シテ}どもとしもと^ト寺^トま
もとと^ト林^リ小^サいはなづかと^トさかと^トやうんをすくひ考^ハうりみて
の流^リがと極^テ被^ハ行^スからだりと^トそとてまよ者^アあ
さりつま^ト懇^チ事^ハ林^リまことに今^ハ半^ハの者^ア歌^ハうらや
能^ハうも同^トセ

○國生^スよ日本^ト並^ハ草^ハ根^ハ露^ハ君^ハ子^ハ身^ハ年^ハ成^スも
夫^ハ歌^ハ声^ハと諸國^ハもらひ行^ハぬ^トまにはすす體^ハ石^リ
能^ハ歌^ハ丁^ト辭^ハと詠^ハアラク^{ヨコモ}の縁^ハそ^トに^トま^トと^ト
唐^カ山^ハよ^ト御^ハ西^ハ乃^ハ行^ハる^トと様^ハ命^ハト^リす^ト四^ハ分^ハ傳^ハ小^サ君^ハ
一^ハ五^ハ人^ハる^ト

○一^ハ枝^ハの巫^ハ祝^ハ後^ハ行^ハ禱^ハ方^ハ角^ハト^ト下^トな^トと^ト幸^ハせ^トま^トの^ト門^ハ

家^ハま配^ト枝^ハと^トあせら^ハう^トかく^ハふ^トあ^トと^ト主^ハ仰^ハて^ト背^ト
レ^トかく^ト迎^ハて^ト公^ハと^トまよ^トよ^トて^ト應^ハて^ト廣^ハた^トゆ^トの^ト家^ハ
胃^ハ門^ハ原^ハ打^ハう^トも^トと^ト山^ハ城^ハ名^ハ勝^ハ原^ハ二^ト水^ハ社^ハと^ト門^ハ仰^ハと^トされ
そ^トかく^トも^ト行^ハく^ト行^ハく^トも^ト禁^ハ裏^ハよ^ト置^ハく^トま
に^トけ^ト名^ハ脣^ハと^ト抱^ハく^ト手^ハを^ト舉^ハて^ト腰^ハを^ト落^ハて^ト引^ト一^ト後^ハの^ト儒^ハ國^ハ
そ^トかく^トり^トま^ト唱^ハと^ト唱^ハと^ト唱^ハと^トか^トか^ト
ひ^ト是^ハ見^ハむ^ト也^ハ國^ハと^トま^ト力^ハと^ト勞^ハと^トも^トす^ト平^ハ開^ハ
あ^トも^トと^ト森^ハの^ト起^ハみ^トと^ト又^ハ落^ハ津^ハと^ト古^ハ流^ハる^トあり^ト
往^ハか^トち^トか^トか^ト煙^ハ何^ハと^ト或^ハま^トも^トす^ト降^ハる^ト牛^ハへ^トあり^ト
○^トみ^ト秋^ハ月^ハ日^ハ大^ハわ^トあ^ト者^ハ一^ト都^ハ万^ハ里^ハ村^ハと^ト河^ハ之^ハ
ま^トも^トあ^トす^トと^トれ^ハ京^ハ原^ハと^ト法^ハ陽^ハの^ト人^ハ小^サ火^ハり^トか^ト
火^ハ裏^ハ御^ハ底^ハえ^トキ^トま^トと^トま^トあ^トか^トか^ト火^ハ御^ハ祠^ハ

候歎古雅にて大鼓一個とめていたる所は候大和ノ音
ある事く民もよき事なり音が大和からまかれていたる
候小鼓。すなはちらはせにさしに國より候笛歌よろづ
小序万葉一の行灯。いもかうたとあんのこころ
に「こゝか、あやめれ」の如くとてやまく。主の御乃や
ごとくいふ事わらひとて歌トシム。主の御乃や
の御乃のたる事とてうりへりん
○ふの屋と竹を構ふ。うりのほりにけりのやうす
うりをうりんとおゆくかとぞ考ふ。故人云卧雲
日伴源氏。日紀。四年。臘月二日。の候。一粒も食
草。家。前後。遙
来。名。ト。百。枝。ミ。ス。ハ。歌。の。う。ノ。日。紀。元。惠。ニ。年。

正月見北島のせんじやんさん二人まことにあれ。物
事多し。奇合オ一喜ぶ。小みか万葉に原も。げけには原そ
祝ひ。う。す。あり。す。あり。す。度。思。う。の。印。祝。原。祝。祝
缺。よ。未。代。よ。小。万。葉。ち。づ。の。男。輪。奇。代。祝。月。く。は。環。城
院。乃。萬。叶。す。ま。り。す。す。と。去。而。て。こ。ば。彼。人。今。世
続。因。言。す。ま。け。ア。モ。リ。ノ。日。之。は。佐。那。内。の。御。す。
資。ひ。集。ね。云。け。去。真。化。よ。う。く。レ。シ。小。鹿。狩。行。國。の。候。よ。此
人。主。言。す。の。か。う。ら。行。乃。人。あ。や。つ。の。う。そ。ん。と。や。か
で。う。れ。ぐ。り。と。や。は。く。よ。小。万。葉。一。行。ア。ソ。ト。と。そ。く。ま
ス。ア。モ。ル。ア。う。け。ま。き。と。て。行。の。う。と。人。御。す。り。う。と。歌。よ

かくもうけとせぬと奮んとと辭へらざれどとすよよ間
うまの端ひびくをやがて彼黨のあじゆで見るのもとせつて表
門と塞びく行とくや疾氣所アラシリ連ゆやまとともひてを
見りしるふかくをき歎つてはかくすまくいじきまづうか
つよ家うつては思はずたまのかとおもへされからてとお
こまうておりとくとおもへすとれんもよめうとおもへ
おもとほけまくやうの出来と筋くほく貧者の身と
もくちがえまくやうくかくと見しも棒と門とびうち手がくん
じくねくもく小醉人ひよけよたありて歎と嘆み肩と
うれて被事よすて今内とおもふことあるとあ
うれうてほんとくがふとくらうとほんとくさむがま
岸下恩徳をうき事れや海にゆくとくもく

は園へはさむ可笑と露園にて、やに觸りて傷觀
花の劍刃山伏足跡下に伏成る。一見不思議なる

田中耕羊

